

平成28年度 自己評価表

鳥取県立米子西高等学校

本校の学校方針	質の高い授業と親身な指導を通して、進路実現に必要な学力をつけるとともに、地域社会の多様なニーズに応え、郷土に貢献する「知、徳、体、志」のバランスのとれた人材を育成する。
指導重点目標	①自己実現を可能にする学力の向上 ②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立 ③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築 ④保護者・地域と連携した活気ある学校づくり

重点目標	年 度 当 初				
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策
①自己実現を可能にする学力の向上	高い志の育成	○目的意識と学ぶ意欲の向上	○進路目標が明確でなく、学習に対する意欲に欠けている生徒がいる ○自らの可能性を低く評価してしまい、チャレンジする姿勢に欠ける傾向がある	○学問に対する興味や意欲を高め、主体的に学ぶ姿勢を身につける ○目標達成に向けてチャレンジする態度・能力を育成する	・キャリア教育・総合的な学習の時間を進める部署を設け、そこを中心に企画・運営・実施を図る ・読書活動・体験活動を充実させるよう関係機関との連携を図る ----- ・2年生の「みらいチャレンジ活動」を活用し探究的な態度を育てる ・1年生、3年生においても「みらいチャレンジ活動」に接続する取り組みを構築する
		○自ら課題を見つけその解決に向けて積極的に行動する態度の育成	○生徒の授業への姿勢が受動的である ○授業改善に対する教員の意識に変化の兆しが見られる ○生徒個々に応じた進路実現に資する授業レベルの一層の確保が必要である	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上を目指す ○アンケートにおける教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上を目指す	・アクティブラーニングの職員研修の機会を設け、学校としての導入を推し進める ・総合的な学習の時間の新たな活動も利用しながら、生徒の能動的な学習態度の育成を図る ・学習科学セミナー参加者、エキスパート教員を中心に研究授業の実施に努める ・ICTを活用した授業等を進める ----- ・予備校や先進校での研修を通じてより効果的な教育課程、授業内容を検討する ・習熟度に合わせた教材・授業内容・評価を検討をさらに進める
学習習慣の確立	質の高い授業の実践	○教員の授業力の向上を図り、生徒が主体的に参加する授業の創造	○習熟度別クラス編成、習熟度別授業のより効果的な展開	○生徒の学力の分析を行い、分かる授業を展開する	・週末課題等を通して家庭学習の習慣を身につけさせる ・毎日、家庭学習時間調査をすることによって、家庭学習の定着を図る ・入学時の初期指導（国数英の学習の仕方の一斉指導）の一層の充実を図る ・学習と部活動の「切り替え」と「集中」を図る
		○高校での学習方法の理解と必要とされる家庭学習時間の確保	○自分から進んで学習する態度が十分に備わっているとはいえない ○予習・復習をしている生徒もいるが、効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○進路実現に向けた学習意欲の向上が必要である	○家庭学習時間調査で次の目標を達成する 平日： 1・2年生2時間以上、3年生3時間以上 休日： 1・2年生4時間以上、3年生5時間以上 ○オリエンテーションを通しての学習習慣の確立と学習方法の理解を図る	・自ら進んで学習する機会を活用する生徒を増やす ----- ・夏季学習会の内容の見直しを行い、家庭学習の増加に繋がるようにする。 ・冬期講習の上位者向け講座は1年生で参加者を増やすように呼びかけ、能動的な学習態度を身につけさせる ・講習・学習会も利用しながら模試の事後指導ともリンクさせ、レベルの高い問題に挑戦させる方策を考える
国公立大学に合格できる力をつけた生徒の増加	学習習慣の確立	○主体的に進路を選択できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○進路実現のために自主的に学習に取り組める生徒は少ない ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある ○組織的・系統的な進路指導が不十分である	○自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・キャリア教育講演会と進路講演会のそれぞれの目的を明確化し、有効に結び付ける ・進路講演会の時期・内容を3年間を見通した視点で精査・計画して行く ・3年生進路調整会の各回の目的を明確にし、それに応じて内容を絞ることで、生徒一人一人にとってより有益となる会議にする ・引き続き先進校視察、教員による大学訪問を実施し、進路指導に有効な情報の収集・蓄積を図り、生徒への指導に活かす
		○模試結果の利用とゼンター試験を意識した指導	○1月進研模試で偏差値50以上の生徒数が1年生で160人以上、2年生で140以上を目指す ○国公立大学の現役合格者60人を目指す	・担任・教科担任からの指導だけでなく、模試分析を基に進路だよりを発行し、模試・受験への取り組み方を啓発していく ・英語の4技能を伸ばす方策を研究授業、研修等を利用し追及する ・校外模試、GTECについては来年度も目標設定を行い、委員会で目標達成の方策を検討する	

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

重点目標	年 度 当 初				
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿） 目標達成のための方策	
②基本的生 活習慣と社 会的規範意 識の確立	基本的生 活習慣の確立	○健全な心身の育成	○懲戒の対象となるような問題行動はほとんどない	○年間の問題行動発生件数0を目指す	・朝の立ち番指導、服装指導、交通指導等現在の指導方針を維持して、継続して指導を行う
		○学力向上につながる生活リズムの確立	○遅刻する生徒が激減した	○さらに年間遅刻者数の前年比10%減を目指す	・朝の立ち番指導、服装指導、交通指導等現在の指導方針を維持して、継続して指導を行う
	社会的規範意識の育成	○社会の一員としての自覚の喚起	○自転車マナーの悪さに関する苦情は少ないが、並進や右側通行をする生徒が見られる ○TEASの活動については、ゴミの排出量、電力使用量、水道使用量とも現在のところ今年度の取り組み目標をほぼ達成できている	○地域からの信頼が向上する ○環境を意識した生活を送る	・交通安全週間での通学指導をより徹底するとともに、クラスや校内に自転車運転の危険性を訴える掲示物を増やす ・生徒会と協力して、生徒の立場から自転車運転マナーの向上を呼びかける取り組みを行う ・TEASに関しては、今年度の目標を達成する努力を継続していくとともに、生徒の環境意識を高める取り組みをしていく
③安心且つ 切磋琢磨で きる人間関 係の構築	健全な高校 生活の充実	○部活と学習の両立ができる生徒の育成	○定期考査前の部活禁止期間も以前より徹底できるようにはなっている ○部室の一斉清掃や部室の鍵の管理など部長・マネージャー会議が機能している	○部活動と学習の切り替えがきちんとできる	・定期考査1週間前の部活禁止期間に大会前で練習を行う場合の手続きについての連絡を徹底し、部活と学習の両立を図ろうとする意識の一層の向上を図る
		○部活動・生徒会活動の活性化	○生徒会活動全般において、生徒会執行部が主体的に活動している	○部長や生徒会執行部を中心とした活動ができる	・生徒会執行部の主体性を最大限尊重し、学校行事を生徒が主体的にかかわる充実したものにする ・部長・マネージャー会議を通じて、諸規則の徹底や部室一斉清掃等、生徒自らが管理できるように指導する
	望ましい人 間関係の構 築	○自己の個性の理解と他者の個性の尊重 ○自尊感情の育成	○コミュニケーションが苦手な生徒や不適応の生徒の増加傾向に対し、定期ケース会議、学年別情報交換会、1・2年生についてはQU結果検討会を行っている ○教科情報（1年次）を中心に情報リテラシーを指導しているが、SNS等でトラブルがおこることがある ○社会貢献活動に学校全体として参加できていない	○自分を含め一人ひとりが大切な存在と認識できる ○良好な人間関係およびコミュニケーションができる	・学年別情報交換会の実施時期の検討を含めた連携方法の一層の工夫を行う ・SNS等も含めた情報リテラシー教育の一層の充実を図る
④保護者・ 地域と連携 した活力あ る学校づく り	学校教育活 動の積極的 な公開	○PTA活動の一層の充実 ○学校と保護者の連帯の強化	○PTA大学訪問研修や交通安全街頭指導にも保護者の積極的な参加がある ○ホームページを利用したの情報発信もタイムリーに行っている	○PTA活動への参加者が増加する ○学校の取組を理解する保護者が増加する	・ホームページ、PTA広報紙で生徒の活動内容を広く保護者に伝えることで、PTAの取り組みを魅力的に発信する ・学校アンケートの内容を見直し、より結果が有効活用できるようにする
		○公開授業や人権公開LHRの充実		○保護者、関係機関、地域からの参加者の増加する	・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更なる活用や地域への発信も行う ・案内を出す関係機関を拡げる方向で見直す
	地域や関係 機関との連 携を深める こと	○中高連携事業の一層の充実 ○文化部総合芸術祭「翠燦く」の一層の充実	○芸術科を中心とした中高連携事業は年々参加者が増加し、内容も充実したものとなっている ○高大連携は不十分である	○各取組への参加者、来場者が増加する	・中学校との連携を図り、内容について早めに検討を行う ・文化部総合芸術祭「翠燦く」は10回目の節目でもあり、一層の内容の充実を図る
	○高大連携の強化と生徒の変容		○各大学訪問の参加者の予定人数が確保できる ○アドバイザーの指導により「みらいチャレンジ活動」の改善ができる	・キャンパス訪問は積極的に全学年から希望者を募る ・個人的にオープンキャンパスに参加させるように積極的に情報を生徒に提供する ・「みらいチャレンジ活動」に島根大学よりアドバイザーを招聘し、より充実した活動となるように改善する	

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）